



132303



日文 701737845

傳信久孝

美善集注
藏卷之十五



中央公論社

萬葉集注釋第十五卷 奥附

昭和四十年七月六日初版 昭和四十九年九月二十日十版

著者澤瀉久孝さわだひさたか

發行者高梨茂 印刷者山田博

印刷所株式會社三陽社東京都板橋區

板橋四丁目四七番七号

發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番地 振替東

京三四番

定價二千八百圓

本文抄造

三菱製紙株式會社

表紙麻布

望月株式會社

製本所

小泉製本株式會社

製函所

加藤製函印刷株式會社

凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。

私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひついた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認めた方を採つた。従つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したもののみ注を加へた。たとへば （紀）尋 （類）とあるは版本に「（紀）尋」とあり、類には「氣」とあるが、紀に「尋」とあるによつた事を示し、（京）柏 （代）とあるは諸本に「（京）柏」とあるが、京の右に「（代）柏」とあるによつた事を示し、（代）波婆 （代）とあるは諸本に「（代）婆波」とあるが、代匠記に「（代）波婆」としたによつた事を示した。

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首に

ついでどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、訓詁の參考にすると共に、古寫本の新たな發見に備へる事も出來ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、六・六）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に従つた。

一、原文の文字は大體舊字體（當用漢字體に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原文又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「礼」（レ）、「尔」（ニ）、「衿」（キ）、「弥」（ミ）の如きである。

一、原文の下に注記（類、十三・二七）は類聚古集第十三卷二十七頁の意であり、（古、一・一六才）とあるは古葉略類聚鈔第一册十六丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の巻は八、九、十、十二と、巻名不明の巻との五册であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられてゐるのに従つた。

一、「西」（右に青）、京（青）、細などヌカシ」とあるは、シの文字が青で書かれてゐる意である。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（九二五）とあるは巻九にある一七九一番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の巻の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下に數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと

記した。古事記も中巻、下巻など書かず、神武記、仁德記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段数をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類従本によるものは(享)(群)と注した。「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は(高)と注した。類聚名義抄は(佛、上)(法、中)など注したものは觀智院本である。色葉字類抄(上)(中)など記したものは三卷本(古典保存會刊)であり、伊呂波字類抄(一)(二)など記したものは十卷本(日本古典全集所収)である。

一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	王	傳王生隆祐筆本萬葉集
金	金澤本萬葉集	嘉	嘉曆(傳承)本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	紀	紀州本(校本に神田本とあるもの)萬葉集
天	天治本萬葉集	西	西本願寺本萬葉集
元	元曆(校)本萬葉集	細	細井本萬葉集
類	類聚古集	陽	陽明文庫本萬葉集(京都大學所藏。校本に溫故堂本とある親本)
古	古葉略類聚鈔	矢	大矢本萬葉集
尼	尼崎本萬葉集	京	京大本萬葉集(校本に京都帝國大學本とあるもの。曼珠院舊藏)
冷	冷泉本萬葉集	無	無點本萬葉集
文	金澤文庫本萬葉集		

附	附訓本萬葉集	
寛	寛永本萬葉集	
仙	萬葉集注釋 (仙覺抄ともいふ)	仙 覺
拾	萬葉拾穂抄	北村 季吟
管見	萬葉集管見	下河邊長流
代	萬葉代匠記	契 沖
(引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、 片カナを用ゐたものは精撰本)		
童	萬葉集童蒙抄	荷田 信名
考	萬葉考	賀茂 眞淵
槻	萬葉考槻乃落葉	荒木田久老
玉	萬葉集玉の小琴	本居 宣長
略	萬葉集略解	加藤 千蔭
檜	萬葉集檜婦手	橘 守部
攷	萬葉集攷證	岸本由豆流
古義	萬葉集古義	鹿持 雅澄
註疏	萬葉集註疏	近藤 芳樹

動植正名	萬葉古今動植正名	山本 章夫
美	萬葉集美夫君志	木村 正辭
文字辨證	萬葉集文字辨證	木村 正辭
字音辨證	萬葉集字音辨證	木村 正辭
訓義辨證	萬葉集訓義辨證	木村 正辭
新考	萬葉集新考	
(安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書があるが、 安藤氏のは引用するところが少く、單に新 考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍 書保存會刊行のもの、國民圖書株式會社刊行の ものとあり、主として前者によつたが、「増訂」 と記したところは後者によつたものである。)		
増、選	増訂本萬葉集選釋	佐佐木信綱
口譯	口譯萬葉集	折口 信夫
總索引	萬葉集總索引	正宗 敦夫
新講	萬葉集新講	次田 潤
新訓	新訓萬葉集	佐佐木信綱
講義	萬葉集講義	山田 孝雄

新解 萬葉集新解
新釋 萬葉集新釋

武田 祐吉
澤瀉 久孝

(伊藤左千夫氏に同じ名の著がある。その場合は著者の名をあげた。)

私解 萬葉集私解

花田比露思

全釋 萬葉集全釋

鴻巣 盛廣

難語難訓攷 萬葉難語難訓攷

生田 耕一

秀歌 萬葉秀歌

齋藤 茂吉

評釋篇 柿本人麿評釋篇

齋藤 茂吉

雜纂篇 柿本人麿雜纂篇

齋藤 茂吉

新見 萬葉集新見

森本 治吉

講話 萬葉集講話

澤瀉 久孝

小徑 萬葉集小徑

土屋 文明

古徑 萬葉古徑

澤瀉 久孝

作品と時代 萬葉の作品と時代 澤瀉 久孝

新校 新校萬葉集

澤瀉 久孝
佐伯 梅友

定本 定本萬葉集

佐佐木 信綱
武田 祐吉

論究 萬葉集論究 第一輯

松岡 靜雄

染草考 日本上代染草考

上村 六郎

植物新考 萬葉植物新考

松田 修

動物考 萬葉動物考

東 光治

續動物考 續萬葉動物考

東 光治

兵庫篇 萬葉地
理研究 兵庫篇

坂口 保
増田 德二

大和志考 萬葉大和志考

奥野 健治

山代志考 萬葉山代志考

奥野 健治

全譯 全譯萬葉集

武田 祐吉

全註釋 萬葉集全註釋

武田 祐吉

(改造社版と角川版とがある。本書は主として前者によつたが、増訂されたところは後者によつた。現代かなづかひになつてゐるものは後者よりのものである。)

評釋 萬葉集評釋

(橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏の同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。)

評釋 評釋萬葉集 佐佐木信綱

(これも著者の名を附した。)

歌人の誕生 萬葉歌人の誕生 澤瀉 久孝

古典大系本 古典文學大系本萬葉集 高木市之助
五味智英
大野晋

大成 萬葉集大成 平凡社版

私注 萬葉集私注 土屋 文明

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國文學 關西大學國文學會

女子大國文 京都女子大學國文學會

山邊道 天理大學國文學研究室

一、引用の諸書の文章は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の論攷の題目には「」を加へ、單行本には『』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ(衣)とヤ行のエ(延)との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列舉しておく。

(甲類) 伎、^キ祢、^ネ古、^コ蘇、^ソ刀、^ト努、^ヌ比、^ヒ敝、^セ美、^ミ賣、^メ用、^ヨ路

(乙類) 紀、氣、許、曾、止、乃、非、閉、未、米、余、呂

萬葉集注釋卷第十五

萬葉集卷第十五

天平八年丙子夏六月遣使新羅國之時使人等各悲別贈答及海路之上慟旅陳
思作歌并當所誦詠古歌一百四十五首

贈答歌十一首 (三六—三六〇)	一一
秦間滿歌一首 (三六〇)	一九
竈還私家陳思歌一首 (三六〇)	二〇
臨發之時歌三首 (三六一—三六三)	二一
乘船入海路上作歌八首 (三六四—三七〇)	二三
當所誦詠古歌十首 (三七二—三七九)	三〇
備後國水調郡長井浦舶泊之夜作歌三首 (三七二—三七四)	四一
風速浦舶泊之夜作歌二首 (三七五—三七六)	四四
安藝國長門島舶泊磯邊作歌五首 (三七七—三八二)	四五
從長門浦舶出之夜仰觀月光作歌三首 (三八三—三八四)	五〇

古挽歌

丹比大夫悽愴亡妻挽歌一首并短歌一首	(三六五—三六六)	五二
屬物發思歌一首并短歌二首	(三六六—三六七)	五六
周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首	(三六八—三七三)	六二
過大島鳴門而經再宿之後追作歌二首	(三七四—三七五)	九九
熊毛浦泊之夜作歌四首	(三七六—三七八)	七一
佐婆海中忽遭逆風漂流著豐前國下毛郡分間浦追怛艱難作歌八首	(三七八—三八三)	七四
至筑紫館遙望本鄉悽愴作歌四首	(三八三—三八七)	八〇
七夕仰觀天漢各陳所思作歌三首	(三八七—三八九)	八三
海邊望月作歌九首	(三八九—三九七)	八五
到筑前國志摩郡之韓亭作歌六首	(三九八—四〇三)	九一
引津亭泊之作歌七首	(四〇四—四一〇)	九五
肥前國松浦郡狛島亭泊之夜作歌七首	(四一一—四一七)	一〇〇

挽歌

到壹岐島雪連宅滿死去之時作歌一首并短歌二首	(美八—美九)	一〇四
葛井連子老作歌一首并短歌二首	(美九—美十)	一〇九
六鯖作歌一首并短歌二首	(美十—美十一)	一一六
到對馬島淺茅浦船舶之時作歌三首	(美十一—美十二)	一二〇
竹敷浦船舶之時作歌十八首	(美十二—美二十)	一二三
回來筑紫海路入京到播磨國家島作歌五首	(美二十一—美二十五)	一三五
中臣朝臣宅守娶藏部女孀狹野茅上娘子之時勅斷流罪配越前國也於是夫婦相嘆易別難會各陳慟情贈答歌六十三首		
臨別娘子悲嘆作歌四首	(美二十六—美二十九)	一三八
中臣朝臣宅守上道作歌四首	(美三十—美三十三)	一四三
到配所中臣朝臣宅守作歌十四首	(美三十四—美四十七)	一四六
娘子留京悲傷作歌九首	(美四十八—美五十六)	一五四

中臣朝臣守作歌十三首 (三六〇—三六六)	一六〇
娘子作歌八首 (三六七—三七四)	一六九
中臣朝臣宅守更贈歌二首 (三七五—三七六)	一七六
娘子和贈歌二首 (三七七—三七八)	一七七
中臣朝臣宅守寄花鳥陳思作歌七首 (三七九—三八六)	一七八

口繪

類聚古集

寫眞目次

生駒山	二一
長井浦	四二
風早浦	四五
山川	四八
桂濱	四九
岩國市新港	六五
可太の大島	六七

雪宅麻呂の墓	一〇七
海上より淺茅山を見る	一二三
竹敷浦	一二五

圖版目次

三原市附近	四三
倉橋島・岩國附近	六三
柳井市附近	六九
防府附近	七四
中津市附近	七五
博多灣	九一
松浦・壹岐	九九
對馬	一二一

